

Vol. 32に寄せて

5月に入り新緑の美しい季節となりました。植物園も緑でいっぱいですが、その中で色鮮やかなハナビシソウの花が満開となっています。薬用植物園では、研究に用いる植物も栽培しており、このハナビシソウは本学医薬細胞生物学研究室で実験に用いられています。成分であるイソキノリンアルカロイドが植物体内で生合成される仕組みを分子レベルで解明することを目指しているとのこと。ハナビシソウは5月が見頃となっていますので、この機会にぜひご覧ください。



5月に見頃を迎える植物：スイカズラ（スイカズラ科）

和名：スイカズラ
 学名： *Lonicera japonica* Thunberg
 薬用部：①葉及び茎、②花蕾
 生薬名：①ニンドウ（忍冬）
 ②キンギンカ（金銀花）
 用途：解熱、消炎、鎮痙、利尿
 栽培場所：植物園 2号園
 開花時期：5月



スイカズラについて

日本、朝鮮半島、中国の各地に生育する常緑性のつる性低木で、茎は円柱状で中空、若い時は軟毛が多くある。葉は対生し、広披針形～卵状楕円形で、長さ3~7 cm、幅1~3 cmである。5~6月に漏斗状の唇形花を2個並んでつけ、しばしば枝先で穂状になる。5枚の花びらの内4枚は合着して上に、残り1枚は下に曲がり込んで唇形となっている。花は甘い芳香があり、初めは白色であるが、次第に黄色に変わることからキンギンカ（金銀色）の別名を持つ。また、芳香は夜間に強いと言われ、夜行性の蛾によって受粉が行われるためだと考えられている。花後に、熟すと球状で光沢のある黒い実をつける。

忍冬について

忍冬は、日本薬局方収載の生薬で、名医別録（神農本草経と同時代の本草書）の上品に収載される。秋または冬に、葉のついたつるを刈り取り日干しして調製する。葉は上面が緑、下面が灰褐色を呈する新しいものが良品とされるが、写真（右）は古いものなので褐色を呈している。茎が多い場合は除いてから使用する。匂いはほとんどなく、味は取れん性で、後わずかに苦い。忍冬は、解熱、消炎、鎮痙、利尿を目的として、主に民間薬として利用されるが、漢方薬（治頭瘡一方など）にも配合される。民間療法としては、煎じて服用する以外に、茶剤や浴湯剤としても利用される。 *金銀花については、裏面をご覧ください



忍冬（ニンドウ）

5月に見頃を迎えるその他の植物 <科名はAPG分類体系による>



シナマオウ（マオウ科）
 生薬名：マオウ（麻黄）
 薬用部：地上茎
 効能：鎮咳・去痰、発汗



シラン（ラン科）
 生薬名：ビャクキュウ（白及）
 薬用部：球茎
 効能：止血、排膿、消炎



ハナイカダ（ハナイカダ科）
 雌雄異株で、花は葉の中央につき、筏（イカダ）に乗っているように見えることが名前の由来。



ミヤマオダマキ（キンポウゲ科）**有毒**
 茎の先に大きな鮮紫色の花を下向きにつける。現在は、生薬としての利用はほとんどない。



ハリエンジュ（マメ科）
 薬用としては使われないが、養蜂家にとっては、貴重な蜜源となる。ニセアカシアとも呼ばれる。



ドイツスズラン（ユリ科）**有毒**
 強心作用を持つ成分を含み有毒植物である。かつては薬としての利用もあったが、今は利用しない。



ノイバラ（バラ科）
 生薬名：エイジツ（當実）
 薬用部：偽果または果実
 効能：瀉下・利尿



カラタネオガタマ（モクレン科）
 生薬名：ガンショウ（含笑）
 薬用部：花
 効能：消化不良、香料など

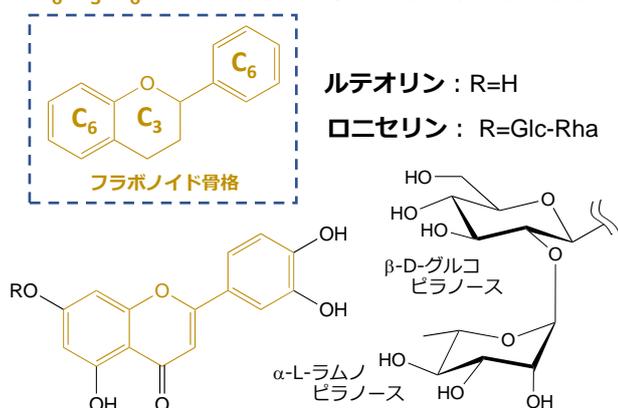
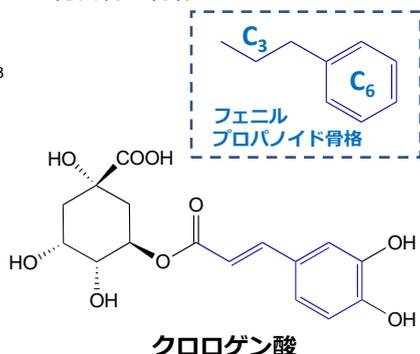
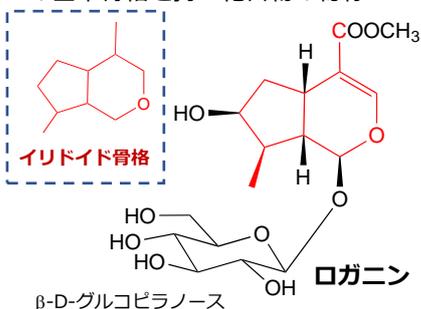
忍冬の成分

忍冬の成分としては、イリドイド配糖体のロガニン、フェニルプロパノイド誘導体のクロロゲン酸、フラボノイド化合物のルテオリン、ロニセリンなどが報告され、これらのうち、ロガニンとクロロゲン酸は日本薬局方の確認試験でその含有をTLC法で調べることとなっている。

イリドイド化合物：変形モノテルペン（ C_{10} 化合物）の一種で、下記の基本骨格を持つ化合物の総称

フェニルプロパノイド誘導体： C_6-C_3 骨格を基本構造に持つ化合物の総称

フラボノイド化合物： $C_6-C_3-C_6$ 骨格を基本構造に持つ芳香族化合物の総称



生薬の金銀花について

キンギンカ（金銀花）は、スイカズラの別名であるが、スイカズラの花（つぼみ）は生薬として用いられ生薬名を金銀花（キンギンカ）と称する。日本薬局方外の生薬である。金銀花は、開花期になるべくつぼみを摘み取り、日陰の風通しの良いところで乾燥させて調製する。開花したものが少なく香気の良い新しいものが良品とされる。成分としては、忍冬と同じくフラボノイドのロニセリン、ルテオリンなどが報告されている。忍冬と類似の効能を持つが、金銀花の方が解熱効果が優れているとされ、中国ではよく用いられる。熱感が強いカゼに向いている銀翹散（ギンギョウサン）に配合されている。



MEMO①：名前の由来

スイカズラの名前の由来は、花の基部に甘い蜜があり、その蜜を吸うからという説、花の形が蜜を吸うときの唇に似ているからという説、おできの吸出しに用いられたからという説など、諸説ある。また「カズラ」は一般につる性の植物の意味で用いられる。英名は、「Japanese Honeysuckle」で、蜜（Honey）を吸う（suckle）という意味である。また、スイカズラは漢字で「忍冬」と書くが、字の通り、冬でも落葉せず、寒さに耐え忍んでいる様子からつけられたと言われている。

MEMO②：帰化植物

帰化植物と聞くと、外国から渡来した植物が日本に定着した植物と考えがちだが、日本の植物が世界に伝播し外国で帰化する場合もある。スイカズラはそのケースであり、ヨーロッパや北アメリカで帰化植物として生育している。しかし、外国から帰化した植物が日本の生態系を乱し大きな問題となること（例えば、オオキンケイギク）があるように、北アメリカの特にニアガラの滝周辺では、スイカズラは有害な帰化植物として問題になっているとのことである。



MEMO③：大神（おおみわ）神社の鎮花祭（ちんかさい）



昔は、花びらが散る時に疫神が分散して流行病を起こすと考えられており、鎮花祭はこれを鎮めるための神事で、「はなしずめのまつり」とも呼ばれる。奈良県桜井市にある大神神社で始まったとされている。第10代天皇の崇神（すじん）天皇の治世に疫病が大流行した時に、大神神社の祭神である大物主大神（おおものぬしのおおかみ）をまつたところ疫病が止んだとされ、厄除けの祭典として今も続いている。現在では、薬草のスイカズラと百合根（ゆりね）が供えられ、製薬業者や医療関係者も多く参列し、医薬品が奉獻されることから「薬まつり」の名前でも知られる。当日は、疫病除けに「忍冬酒」などが授与されるそうである。



ミニ知識：民間薬と漢方薬

民間薬と漢方薬という言葉は、植物園レターにもよく出てきますが、今回は、その違いについて簡単に説明します。

民間薬は、経験的に伝承された薬で、通常は1種類の薬用植物または生薬（植物などの天然物に加工を施して作った薬）が用いられます。民間薬は、ある特定の症状に対して用いられ、医師・薬剤師などの専門職が関与せず使われることが多いです。

漢方薬は、漢方医学の理論に基づき、複数の生薬が混合された薬で、患者の「証」に合わせて処方が決まります。「証」とは、患者の病状だけでなく体質なども含めた病態を表しており、漢方薬は、特定の症状の改善のみに用いるものではありません。ドラッグストアなどでは、医師の処方箋が無くても購入は可能ですが、その効果を最大限に得るためには、専門職の関与が推奨されます。



編集後記

5月、ベンゼン池北側の花壇では、ユキノシタ（ユキノシタ科）が満開となっています。小さくてあまり目立たないですが、可愛い花がたくさん咲いています。少し時間のあるときにでも、是非ベンゼン池周辺を散歩してみてください。



神戸薬科大学 薬用植物園

園長 小山 豊（薬理学研究室 教授）

西山由美（文責）、平野亜津沙、大井隆博

E-mail : nisiyama@kobepharma-u.ac.jp

協力 竹仲由希子（総合教育研究センター） 植物園にも有ります

